

浄土系直談と説話

——標題説話の背景(上)——

高橋伸幸

一 直談と談義

現在、中世から近世初期にかけて、いはゆる正統な仏教観から言へば狂言綺語に類する説話や和歌等を、比較的多く鏤めている仏典解釈の書物(必しも、経典の注釈のみに限定せず)を「談義本」と呼んでゐる傾向が強いが、この種の書物群に対し、「談義本」といふ名称を、學術論文にて始めて使用されたのは、宮崎円遊氏の「中世に於ける唱導と談義本」(『宗学院論叢』第廿七号、昭和十三年八月。のちに『真宗書誌学の研究』に収録)あたりでなからうかと思ふ。宮崎氏は「唱導―談義」として、「成立や性質には色々異つた事情もあらうが、ともかく、唱導に使用されたと考へ

られるものを近代の言葉であるが「談義本」と総称し」と述べられ、更に「談義本の他の書物と区別されるところの色とも言ふべきものを一言するならば」として、「談義本」を次のやうに定義された。それは

その説くところの教法は煩雑な教義的説明よりも、寧ろ達意的な平易な叙述であり、而かもその理解を助け、所説の効果を大きくするために、種々の因縁説話を交へたもの

と言ふことである。そして、中世の談義本を

- 1、経典を中心としたもの
 - 2、法義宣説
- ―経典を中心とせず、俗耳に入り易く宣説するもの

3、個人に関する因縁談―積尊を初めとする高僧等個人の伝記に関する因縁説話

4、因縁説話其他の類聚・集成

の四類に分類され、その代表的なものとして、たとへば1では『法華経直談鈔』ほか、2では『十王本迹讚嘆修善鈔』ほか、3では『為盛発心因縁』ほか、4では『私聚百因縁集』ほかを掲げられた。

この「談義本」の名称に対して、主として近世の立場から、異を唱へられたのが後小路薫氏である。後小路氏は「近世勸化本刊行略年表」(『文藝論叢』第十号、昭和五十三年三月)に於いて

国文学の分野には、滑稽本の嚆矢として「談義本」と呼ばれる作品群があるため……混乱するおそれがあり、また、いまは説教を中心にその周辺までも考慮に入れたいため、わたくしに「勸化本」と呼ぶことにした。

と記されて「勸化本」の名称を提唱された。但し、この名称は、主として「真宗および浄土宗」の「高座で語られる説教を中心としつつ、より広く一般庶民へ仏教の教化を目的としている書籍を勸化本と呼ぶ」と限定された上での事である。そしてその「勸化本」の種類を御論文から要約すると、

① 經典や諸種の聖教を解説し教化するもの。

② 直接聖教によらないもの。

③ 内容別部類が施されてゐるもの。

④ 寺院・仏像等の縁起・由来譚・個人の伝記及びそれらの類聚。

⑤ 説話の類聚。

⑥ 説教の心得・指導書。

の六種類に区分されてゐる。先に掲げた宮崎氏の分類に存しない⑥はともかく、1 ①②③、3 ④⑤といふ形に落ちつくのではなからうか。やや分類が異なるのは、宮崎氏は中世を中心に近世初期へ、一方後小路氏は、近世中心にされてゐるからである。

以上、顧みてきたところは、主として、浄土宗系(浄土宗・浄土真宗・時宗を含めて)のテーゼであるが、渡辺守邦氏・広田哲通氏・小林直樹氏等により研究が進められてゐる天台宗系の一群があり、歴史的に見るならば、こちらの方がより古いのは当然といへようか。詳しくは右の方々の御論を参照願ふこととして、若干、私見を挿むとすれば、広田氏が直談物、或は直談系と呼ばれる一群の書物は、確に、「談義本」として先に宮崎・後小路両先学の御論文を要約した内容に比して狭い範囲といへるかも知れぬが、そ

の含まれる宗派、呼称としての時間的な長さからいへば決してそれほど狭い範囲とはいへない。たとへば、真言宗では、智積院第二代祐宣(慶長十七年、七十七歳にて入寂)によつて元龜・天正間に左のやうな「直談鈔」が執筆されてゐる。

- 1 俱舍論疏直談鈔 十三卷 (智積院蔵)
- 2 因明三十三過本作法直談抄 一卷 (同右)
- 3 三路口十八道直談鈔 三卷 (六波羅蜜寺・成田図書館蔵)
- 4 不動護摩私記直談鈔 二卷 (智積院・六波羅蜜寺・高野山真別処他蔵)
- 5 大威徳護摩直談鈔 一卷 (智積院蔵)
- 6 降三世護摩直談鈔 一卷 (同右)
- 7 金剛夜叉護摩直談鈔 一卷 (同右)
- 8 軍荼利法直談鈔 一卷 (同右)
- 9 般若心経秘鍵直談鈔 一卷 (智積院蔵)
- 10 金剛界礼籤文経直談鈔 一卷 (智積院・高野山持明院蔵)
- 11 胎蔵界礼籤文経直談鈔 一卷 (智積院蔵)
- 12 光明真言直談鈔 一卷 (自筆本・智積院蔵、寛文二年版・龍谷大・智積院他蔵)

* 1は元龜四年(一五七三)、2・3は天正四年(一五七六)、4・8は天正五年(一五七七)、9は天正十六年(一五八八)、10・12は天正十九年(一五九一)の各執筆である。他に名のみであるが「理趣経直談鈔 二卷、大日経談義 四卷」が知られてゐる。

これらの祐宣の一連の著作のほか、真言宗の純瑜(天正十年、六十二歳にて入寂)により永禄十三年(一五七〇)『理趣経直談鈔』二卷が執筆されてゐる。祐宣の著作は12以外写本にて伝来し、いづれも未刊で容易に披見することが出来ないのも、一斑にて全豹を推すわけにはいかないが、純瑜の直談鈔ともども頗る硬質なる著述で、僅に例示として挿入されてゐる説話は、いづれも經典に依拠したものでありである。

右に掲げた祐宣の一連の直談物は、時間的には、かの栄心の『法華経直談鈔』に遅れること二三十年に過ぎないから、粗同時期と言つていい。一方の天台宗は、既に鎌倉時代から「直談」の用語を用ゐてゐる。たとへば、『法華経』では

イ、法華直談私鈔 一卷 真如蔵

は、内題下の識語に

正慶元年(一三三三)壬申十一月廿六日如之

とあり、末尾の奥書には

正慶元年十二月五日讀之畢

とあつて、正しく鎌倉末期の講義(直談)である。『法華經』以外では、『梵網經』が、南北朝期になつてであるが、

(甲)梵網經直談抄 二卷 大谷大学・天海藏・真如藏の巻頭識語に

文和二年(一二三三)八月朔日於圓音寺

とその直談開始の日附を記してゐる。

次に最も遅くまで使用した例としては、浄土宗の源菅隨流(一法)の

(イ)本願直談略抄 八卷八冊

(ニ)仏説觀無量壽經直談鈔 十卷十冊

(ホ)選択集直談鈔 十卷十冊

等があり、(イ)(ニ)は正保四年(一六四七)、(ホ)は正保三年(一六四六)の各刊行になる。

一方、浄土真宗では、羊歩の

(イ)往生要集直談 廿五卷九冊

が延宝二年(一六四七)に、浅井(了義坊)了意の

(イ)往生十因直談 十四卷十四冊

(ロ)仏説十王經直談 十三卷十三冊

が天和二年(一六八二)の成立、仏光寺派の玄貞貞阿の

(イ)四誓直談 六卷三冊

が元禄十年(一六九二)刊行(猶、同年刊行の直談に真言宗系の『延命地藏菩薩經直談鈔』龍山必夢著もある)と、概ね、十七世紀末まで「直談」と命名される書物は著作、或は刊行されてゐる。以上のやうに、書名としての「直談」は、管見の範囲でだが鎌倉時代末期の十四世紀初頭から、江戸時代前期の十七世紀末まで、延々四世紀に渡つて使用された。これは、諸先学により既に指摘されてゐるやうに、「直談」といふ語が、普通名詞(時にサ変動詞を下接して動詞としても)であつたからで、「談義」「法談」「講談」といふも同義であり、より簡略には単に「談」(敬意を示しては「御談」、謙讓しては「僻談」など)と用ゐてゐるといふ事実に基づくものであらう。各々一例を掲げるならば、

「直談」|| 文安貳年乙丑(一四四五)、從三月十六日文句第一卷始行之、同三年丙寅卯月十九日ニテ文句第四談畢、爲直談出要文(真如藏、長禄本『妙法蓮華經』卷一奥書)

「談義」|| さて此ほと大日經の(疏)しよのたんぎ候、住心品御たつね候てかし給はり候ハ、かしこまり入候(金沢文庫藏『華嚴探玄記卷二疏抄類聚』第二紙背)

文書、円鏡より湛叡宛)

右見聞者東福開山國師御談義、前住東福佛通禪師御自筆之本也。正中二年乙丑之曆(一三二五)八月廿八日書寫畢(谷中天王寺藏『大日經見聞』卷十奥書)

「法談」|| 文永七年(一二七〇)三月廿三日於龜山殿修止觀法談(妙法院藏『摩訶止觀法談』卷頭識語)。

猶、真如藏の十二卷三冊本の卷十卷頭識語には「文永七年三月廿三日於龜山殿修止觀御談義事」とある。

「講談」|| 予常陸國小野逢善寺別當坊居住之砌、講談令申候(日光天海藏『三代部序見聞』雄海法印奥書)。

「僻談」|| 止觀見聞添注云、明應頃住月山寺……僻談而令記矣(曼殊院藏『止觀略大綱見聞』)。

右のうち「講談」は江戸時代に於いても頻繁に用ゐられ、大衆芸能の一つの名称として現代まで継続して用ゐられてゐる事は周知の事実である。また、安居院聖覚の編輯になつてあらうと推定される。『言泉集』(一)「最勝講作法・表白」にも

迎春季、迎夏季、或七日或五日、講讀、延席、論談重座、抑講、經論談之夜、聞法得益之砌、天神地祇降臨影向(シ)

タマフラム

講、說、揮、舌、……大辨來講、席、堅、宰、載、ラ、ム、法、座、

の如く、「講經論談」「講說」「講席」と使用してゐるその意味は、鎌倉・室町の直談と、やはり通ひ合ふ内容と言へよう。

そしてそれはともかく、中世から近世を通して使用されてゐるこれらの用語は、經典の講釈・宗義の講說問答等について用ゐられ、その結果としての聞書や、講釈・講說の爲の手控に書名としても使用されたといふ事である。従つて、「直談系」と言つた場合、先にも述べた如く、書名として認められるだけでも四百年に渡り、宗派に於いても、天台・真言等の旧仏教から浄土・浄土真宗の新仏教にまで及んでゐる。只、内容的に見るならば、次章に述べる浄土宗のそれを含めて、宮崎円遵博士の1、後小路薫氏の①に含まれるものが「——直談鈔」の名を負つてゐる事は否めない。その点から、「談義本」「勸化本」の有する領域に比して狭い。逆に、「談義本」「勸化本」の中の「直談系」或は「直談物」といふ事になるであらう。そしてその質的内容としては、四七〇項余の説話を含む『法華經直談鈔』から、僅かに經典伝来の由来に説話的要素を含む純諭の『理趣經直談鈔』に至るまで、千差万別と言ふ事になる。

*一、『理趣經直談鈔』の奥書には

于時永祿十三年^{庚午}初秋之比、於八葦山門、卒數輩之學徒
誦讀畢。以其次令草案之。……糸玉^{年五十一 西曆三十一}（糸玉は純
瑜の篇を記したもの）

とあつて、講釈の為の手控（講義ノート）として記された
事がわかり、榮心の『法華經直談鈔』の編述と、ケースと
しては同じである。

*二、拙稿の範囲外では、石井行雄氏が、御自身の専門領域
からはづれるけれどもとおつしやりつつ私共に示して下さ
る南都東大寺・興福寺等の直談書の一群があり、その中に
は南都仏教の講經の場で育まれて来た説話の世界が存す
る。また、牧野和夫氏や廣田哲通氏・阿部泰郎氏等が中心
に調査していらつしやる由仄聞する日蓮宗系の直談など、
探索・研究すべき世界は、無限とまでは言へないにしろ非
常に広く深いのである。

二 浄土宗の直談系書籍群

前章でも江戸初期成立・刊行の書籍数点を掲げたが、本
章でまとめて概観しておかう。浄土宗の直談系書籍は、

A、浄土三部經

B、其の他の經典

C、宗義上の典籍

の三分野となる。Aは『無量壽經』『大經』と略称される)

『觀無量壽經』（『觀經』と略称される）『阿彌陀經』（『小經』
と略称される）の三經で、「浄土正依三經」と呼ばれる。B

は「正依一論」と呼ばれる『往生論』の他、傍依經論と呼
ばれる經論群である。Cは源空の『選択本願念仏集』に始
まる日本撰述の宗義上の典籍群と、「五部九卷」と一括呼
称される『法事讚』『往生礼讚』『觀念法門』『般舟讚』『觀
經四帖疏』のうち、『觀經四帖疏』をAに移した残りの四
部、更に中国歴代の僧侶の撰述論著をこのグループとする。

*但し、以下に掲げる書籍群のすべてが必ずしも口頭による
講義の場（即ち講席）を経過したといふ保証はない。更に、
講説の聞書・講説の為の手控（即ち現代でいえば講義ノート）
をも含み、もつと言へば、講説した積りで、書齋に当る寺
院の一室で筆を馳せたものも当然あると思ふ。しかし、執
筆者の脳裏には、常に弟子の、或は信者の姿が存したもの
と、少くとも私には断言できる気がするのである。以下、
個人の独断かも知れないが、右のやうな著者の意識・場
（執筆の）を考慮に入れてお読みいただきたい庶幾ふ。

A、浄土三部經

A1、無量壽經

イ、無量壽經鈔（大經鈔） 七卷 了慧道光 永仁五年

（二二九七）成立。慶長十九年古活字版他。浄全第十

四卷所収。

元年(一六五五)版他。浄全第三卷。

ク、無量寿経鈔見聞(大経鈔見聞) 七卷 良栄理本。 応永五年(一三九八)成立。寛永十八年版他。

ホ、観経厭欣鈔 三卷 一中融舜。永正三年(一五〇六) 自序。宝永元年(一七〇四)版。西山全書第八卷、大 日本仏教全書。

ハ、大経直談要註記 廿四卷 西誉聖聡。永享五年(一 四三三)成立。元和寛永頃古活字版(廿四冊)他。浄 全第十三卷。

ヘ、仏説観無量寿経直談鈔 十卷 源誉随流。正保四年 (一六四七)刊。

ニ、四十八願釈 五卷 聖覚。元禄三年(二六九〇)刊。 ホ、本願直談略抄 八卷 源誉随流。正保四年(一六四 七)刊。

ト、当麻曼陀羅疏 四十八卷 西誉聖聡。永享八年(一 四三六)成立。慶安二年(一六四九)刊他。浄全第十 三卷。

ヘ、無量寿経隨聞講録 下之一、二(残闕)二冊 江戸 中期写。

チ、観無量寿経隨聞講録 上・中之一(残闕)二冊 宝 永四年(一七〇七)講説。江戸中期写。

A 2、観無量寿経

リ、当麻曼陀羅秘決直談鈔 十一卷 称往院西阿。享保 三年(一七一八)刊。

イ、観経疏伝通記 十五卷 然阿良忠。建治元年(一二 七六)成立、弘安十年(一二八七)修訂。浄全第二卷。

A 3、阿弥陀経

ロ、伝通記見聞(伝通記遅沢鈔・坂下見聞) 十五卷 寂 慧良暁。応長二年(一三二二)成立。大日本仏教全書 第六十一卷、統浄全第三卷。

イ、阿弥陀経直談要註記(小経直談要註記) 八卷 西誉 聖聡。永享七年(一四三五)成立。慶安元年(一六四 八)刊他。浄全第十三卷。

ハ、伝通記見聞(大沢見聞) 廿六卷 良栄理本。古活字 版(観経四帖疏伝通記見聞)他。

ロ、阿弥陀経秘直談鈔 三卷 観誉祐崇。延徳二年跋 (二四九〇)。元和七年(一六二二)古活字版、寛永廿 一年(一六四四)整版(両本は底本を異にす)他。

ニ、伝通記糅鈔 四十八卷 了誉聖罔。明徳四年(一三 九三)十一月起筆、応永二年(一三九五)完成。明暦

ハ、阿弥陀経私集抄 三卷 堯慧善偉。享保二年(一七

一七)版。

- ニ、阿弥陀經訓読鈔 三卷 寛永十年(一六三三)版他。
 - ホ、阿弥陀經俚諺鈔 一卷 覺道。江戸後期写。
 - ヘ、阿弥陀經和解講弁鈔 卷一〜三(殘闕) 江戸中期写。
- 以上、室町時代から江戸時代初期の主要なものを掲げた。但し、浄土宗各流派の寺院所蔵典籍の調査が浄土真宗のやうに進展してゐないといふ事と、歴代学匠に対しての研究も同様に進んでゐない事とが相俟つて、管見に入つたのは、恐らく著述されたであらう著作のほんの一斑である事をお断りしておく。

B、其の他の經典

- B 1、浄土往生論(無量寿經論)
- イ、往生論註記 五卷 然阿良忠。弘長三年(一二六三)稿、弘安九年(一二八六)補訂。浄全第一卷。
- ロ、往生論註私記 七卷 円空。鎌倉初期成立か、元禄七年(一六九四)版他。
- ハ、往生論註刪補鈔 十二卷 浄音法興。鎌倉中期成立か。寛文元年(一六六一)刊。
- ニ、往生論註拾遺鈔 三卷 望西棲了慧。嘉元四年(一三〇六)成立。浄全第一卷。了慧には、『往生論註略鈔』三卷(浄全第一卷所収)もある。

ホ、往生論註私集鈔 七卷 堯慧善偉。明德二年(一二三九)成立。享保三年(一七一八)刊。

- ヘ、往生論註記見聞 十卷 西誉聖聡。浄全第一卷。
 - ト、往生論註記見聞(大沢見聞) 五卷 良栄理本、浄全第一卷。
- C、宗義上の典籍
- C 1、選択本願念仏集
 - イ、選択伝弘決疑鈔 五卷 同決疑鈔裏書 二卷 然阿良忠。建長六年(一二五四)成立。慶長十四年古活字版他。浄全第七卷。
 - ロ、選択集決疑鈔直牒 十卷 了誉聖罔。応永三年(一三九六)成立。寛永六年(一六二九)版他。浄全第七卷。
 - ハ、決疑鈔見聞(坂下見聞) 五卷 良暁。嘉元二年(一三〇四)成立。慶安四年(一六五〇)版他。浄全第七卷。
 - ニ、選択決疑鈔見聞(藤田見聞) 十卷 持阿良心著良栄理本補。享保十三年・十四年(一七二九)版他。浄全第七卷。
 - ホ、選択集直談鈔 十卷 源蒼隨流。正保四年(一六四七)刊。

C 2、往生要集

- イ、往生要集義記 八卷 然阿良忠。寛永古活字版他。
 淨全第十五卷。
- ロ、往生要集指塵鈔 廿五卷 廊瑩。天和三年(一六八三)版他。
- C 3、往生講式
- イ、往生講式啓蒙 八卷 必夢。元禄五年(一六九二)版。
- ロ、往生講式私考 二卷
- C 4、往生十因
- イ、往生十因私記 三卷 了慧。承応二年(一六五三)版。淨全第十五卷。
- ロ、往生十因糝要鈔 三卷 良蒼。承応三年(一六五四)版。
- ハ、往生十因見聞新鈔 三卷 貞準。明暦元年(一六五五)版。
- C 5、法事讚
- イ、法事讚私記 三卷 然阿良忠。建長八年(一二五六)下総福岡西福寺(現、八日市場市)にて講説『法事讚私記問書』良忠談、良聖筆録。金沢文庫蔵、上巻のみの奥書)。現私記は建治二年(一二七六)頃成るか。淨全第四卷所収。
- ロ、法事讚要略記 二卷 入阿。
- ハ、* 法事讚管見鈔 一卷 性仙道空。
- ニ、* 法事讚卷上見聞集 一冊。
- * ロハニは共に金沢文庫蔵古鈔本。未見。
- ホ、法事讚私記光明鈔 四卷 長西。現存二卷四冊(金沢文庫蔵、文永五年(一二六八)永源写。未見)。
- ヘ、法事讚私記秘鈔 二卷 行観。嘉暦三年(一三二八)成立。写本・大谷大他。
- ト、法事讚私記見聞 三卷 酉誉聖聡。淨全第四卷。
- チ、法事讚私記見聞(大沢見聞) 三卷 良栄理本。淨全第四卷。
- リ、法事讚私記檢要 七卷 了秀。宝永四年(一七〇七)刊。龍谷大他。
- ヌ、法事讚私記私鈔 三卷 加祐。寛文四年(一六六四)刊。淨全第四卷。
- ル、法事讚積学要義鈔 二卷 実信房蓮生。寛文十一年(一六七二)刊。大谷大他。西山全書第四卷、大日本仏教全書第五十六卷。
- C 6、観念法門
- イ、観念法門私記 二卷 然阿良忠。建治二年(一二七六)頃成立か。淨全第四卷。
- ロ、観念法門要略記 一卷 入阿。金沢文庫蔵(建治二

年(一三七二)四月十五日書了。

八、觀念法門觀門要義鈔 三卷 証空。承久三年(一二二二)八月十四日始之、貞応元年(一二二二)八月廿九日了。西山全書別卷一。

九、觀念法門秘鈔 三卷 行觀。大谷大他に写本。

十、觀念法門管見鈔 二卷 導空。金沢文庫藏。

十一、觀念法門私記見聞 二卷 聖聡。浄全第四卷。

十二、觀念法門私記見聞(大沢見聞) 二卷 良栄理本。浄全第四卷。

十三、觀念法門私記私鈔 二卷 加祐。浄全第四卷。

十四、般舟讚 一卷 然阿良忠。浄全第四卷。

十五、般舟讚要略記 一卷 入阿。金沢文庫藏。

十六、般舟讚管見鈔 二卷 道空性仙。金沢文庫藏(他に元応二年(一二三〇)長胤写の上卷一冊あり)。

十七、般舟讚觀門義 七卷 証空。貞応元年(一二二二)成。西山全書第四卷、大日本仏教全書第五十六卷。

十八、般舟讚私記秘鈔 一卷 行觀。大谷大他に写本。

十九、般舟讚私記見聞 一卷 西誉聖聡。浄全第四卷。

二十、般舟讚私記見聞(大沢見聞) 二卷 良栄理本。浄全第四卷。

二十一、般舟讚私記私鈔 一卷 加祐。浄全第四卷。

二十二、般舟讚私聚鈔 五卷 智円。龍谷大蔵(元禄六年写)。

C 8、往生礼讚

一、往生礼讚私記 一卷 然阿良忠。正嘉元年(一二二五)上総にて講述(金沢文庫藏。良聖書写聞書、一帖)。浄全第四卷。

二、往生礼讚要略記 二卷 入阿。金沢文庫藏。

三、往生礼讚要義積觀門義鈔 七卷 証空。建保五年(一二二五)元仁元年(一二二四)成立、寛文二年(一六六二)刊。西山全書第三卷、大日本仏教全書第五十五卷。

四、往生礼讚秘鈔 三卷 行觀。大谷大他に写本。宝暦十二年(一七六二)刊。

五、往生礼讚私記見聞 二卷 了誉聖罔。応永十七年(一二二〇)庚寅卯月八日始之、御口筆能化御年七十(上卷)、五月廿二日始之(下卷)。浄全第四卷。

六、往生礼讚私記見聞 二卷 西誉聖聡。龍谷大蔵。

七、往生礼讚私記見聞(大沢見聞) 二卷 良栄理本。浄全第四卷。

八、往生礼讚堯慧鈔 三卷 堯慧善偉。明德元年(一三九〇)成。大谷大他写本蔵。

リ、往生礼讃私記私鈔 二卷 加祐。浄全第四卷。
C9、安楽集

イ、安楽集私記 二卷 然阿良忠。弘安五年(一二六五)
成。浄全第一卷。

ロ、安楽集私記見聞(大沢見聞) 二卷 良栄理本。浄全
第一卷。

ハ、安楽集新鈔 五卷 貞準。天和三年(一六八三)刊。
大谷大他蔵。

以上、主要な直談書及び、その系列下に存する書籍に限
定して掲げたわけだが、このやうな、弟子及び信者を前に
しての談義(『講義』)は、決して右に列記した江戸初期に
て終るものではなく、江戸時代を通じて、各檀林(『学校』
に於いて行はれたのである。そして明治の排仏の嵐の中で、
一時断絶の期間は存したが、世情の落居と共に、講義(『
談義?』)は復活した。但し、それまでの談義または直談で

括られる形態とは全く異なつた内容となり、そこに説話的
要素の介在は殆ど零に等しくなつた事は、現に活字化され
てゐる注釈書群を見れば明らかである。

では、鎌倉時代から約五百年に及ぶ中世・近世初期の直
談・談義(『仏典——広義での仏典——講義』)に於いて「説
話」はどのやうに拘はつてゐるのか。また、どのやうな説
話が拘はつてゐるのかを、実際の筆録によつて瞥見してみ
ることとする。

*一、但し書名を列挙した中にも注記したやうに、金沢文庫
蔵の書籍については披見が叶はなかつた。

*二、江戸時代版行の書籍については、最も古いであらう版
行年次を掲げたが、正確か否かは自信がない。活字本その他
は架蔵本と友垣の好意により大谷大学・龍谷大学・叡山文
庫の御所蔵典籍を披閲せし世界のみであるから。

(札幌大学教授 国文学)

(平成四年五月十三日受付)